

## サタデー・パフェ「秘密基地をつくろう」

1回目 2022年6月11日（土）

2回目 2022年10月15日（土）

場所 霧霧。「アリスの家」（亀岡市・並河）

学びの森のワークショップシリーズ「サタデー・パフェ」の、初回を担当した小澤亜梨子。当時小澤は、活動拠点を亀岡に移すことを決めた頃で、借り始めた小さな家に、何を置くといいだろうかを子どもたちと考えるワークショップを企画。二回目は、すでに住まいを移した後で、外壁の一部を明るく塗装するプログラムを考えた。

最寄駅で待ち合わせて、「アリスの家」までの約15分ほどの道中もワークショップの一部となった。

インタビュー：小澤亜梨子（イラストレーター・デザイナー）  
聞き手：奥山理子、阪本結（みずのき美術館）

奥山：3じのアトリエのようにお客さんひと組ずつの対応と、サタデーパフェのような一度に沢山参加者がいる場合の対応は違う？

小澤：それに関しては向き不向きがあって、答えは完全に出ているんです。対象者が大勢になればなるほど、私は向いてないなって思います。それぞれの反応に気が散っちゃって、てんわやんわになってしまう。人数が少ない方が、その子が好きなものとか見つけやすくなるけど、いっぱいいると分かりかけた時に違う子に行ってしまったりとかする。

なので複数の参加者がいる場面は、私自身がトレーニング気分では挑んでいるところがあります。慣れないなっていう気持ちもあるので。

そういう意味では、ひと組・ふた組くらいがポツポツ来るような3じのアトリエの今の状況は、自分に合っているなって思います。色んな話を聞きながら、子供たちが思っていること、感じていることをよく聞けるので。「学校はどう？」とかも。

そんな関わり方が好きやなあと思う一方で、その選択に到達するのはまだ早くないかな、もうちょっとおばあちゃんになってから落ち着くとこなんじゃないかな、みたいなことも考えるんですけど。

大勢を相手にするときは、いつもドキドキしながらやっています。複数の参加者がいる中でも、個人的に喋りやすい、気の合いそうな子どもがいたりします。気の合いそうなこの子と一緒にいたらきっと面白いもの生まれそうだなあと思いつつも、でもそれって、せっかく来てくれてるのに公平じゃなくなっちゃうでしょ。結果、私はその機会を切り捨て出ちゃうんですよね。

サタデーパフェの2回目のワークショップの時に、アトリエの材料に興味もってくれてた子がいて、自由にいじってくれていたんです。でもその子に関わり始めちゃうと他の



子たちを見ないことになっちゃうと思って、あんまりタッチせずにいたんです。そしたら、（記録撮影を担当した写真家の）梅田さんはそれをよく見てはって、後から「アリスちゃん、あれは関わったほうが面白かったんちゃう？」って伝えてくださって。関わるっていう選択もありだったのかあと。そんなわけで、まだ大勢との距離感は探り中ですね。

阪本：さっき、「ここ、私ん家（ち）やから、見せたい資料取りに行けるんやった」って言って取りに行ってくれたように、亜莉子さんの、日常の生活とアトリエとして開いている空間が近いことって結構特殊やなって思うんです。自分のテリトリーを狭い中に設けていて、そこに入るだけの人と接するのが、亜莉子さんのサイズ感なんやろうなと思って。

小澤：人によってはネガティブに聞こえるかもしれないんですけど、究極に内へ内へ向かって行った結果というか。自分が外に行かなくてもいいようにするには、来てもらったらいいんやってところから始まって。

阪本：逆転の発想。

だからかな。今回のワークショップでは二回とも、「亜莉子さんの家」に関連することをやってはったのが印象的でした。家を自分の好みの空間にするって面白いよね！っていう共有やったのかな。この場所に親しんでもらいたかったんですか？

小澤：最初はわりと形から入ったんです。最初に「秘密基地」をテーマにして、引越したてでまだ何も置いてない部屋でやるからには、みんなの作業の痕跡が、新しい家の一部になったらいいなっていう発想でした。町屋をみんなで改修するプロジェクトとかに憧れもあって。でもやってみたら、そんなに大掛かりなことはできないなって、結局こじんまりとしたことを2回やったんですけど、それはそれでよかった。



奥山：新しい拠点をもち始めてイチから立ち上げていくタイミングで、この一年ワークショップを通して、亜莉子ちゃんの試みが見れたのは面白いよね。ワークショップしようって言った頃には、まだここは何もなかったわけで。

小澤：ほんとですね、人生の転機に。

奥山：私たちも目撃者として目の当たりにさせてもらった。

阪本：ドキュメンタリーですね。「アリスの家ができるまで」みたいな。

小澤：実はサタデーパフェは、毎回不安ではあったんですよ。提供できるものがまだなかったし。ふわふわとどうやろって思いながらやっていたので。終わってからのほうが、やりたかったことや、やったことがはっきりし出した感じですよ。

奥山：その時差も大事なのかも。ワークショップから展示まで時間が空いているからこそ、一回振り返って見えてくるものとか、こことこことが繋がっていたんだって気づくとか。子供たちが反応するタイミングとは違うのかもしれないけど、「大人のタイミング」もあるっていうことも、頭ごなしに押し付けるものじゃなくて、知ってもらえる機会も必要かもね。自分の知らない時間軸で生きている人だっているんだと。展覧会の中では、そのあたりを意識してもいいのかもしれない。

小澤：大人が体験して咀嚼するまでには、こんだけ時間がかかるって話なのかもしれない。その頃子供たちはもうすっかり食べ終わって、うんこになってるかもしれんけど。

奥山：子供たちに今更？って呆れられるかもしれないけど、「今更なんです」ってね。

阪本：私は、ワークショップの当日に子供たちに混じって車で集まって、「これから亜莉子さんの家に行くぞ」ってみんなで連れだって、駅からの道のりもちょうどいい長さだから、気持ちが高まっていくというか。ドアの前に立つ頃には気持ちが出来上がっている感じがしました。

奥山：アドベンチャー感はあるよね。途中で川もあるし。

阪本：人ん家（ち）にお邪魔して、キッチンまで見えて、

初回の時は2階にも上がったし。「人ん家（ち）にお邪魔する」だけでも謎の体験やったなって改めて思いました。私は子供代表じゃないからあれなんですけど、来た側の体験談としては、この家に流れる時間はこれなんやなっていう雰囲気が一貫してあったなって。「アリスさん家（ち）に遊びにきたらこんな感じ」みたいな。

小澤：たしかに友達の家に対しても思ったりしますしね。すごいじっくり来ました。やっぱり「家」だったんだって。

奥山：それ、ワークショップの直後だったら辿り着かなかったかもしれないね。

小澤：はい。ただ反省して終わってた気がします。多少の美化もあるのかもしれないですけど、でも整理された今、最終的に残っている気持ちが「悪くなかったかも」って。

奥山：それが、私たち大人に必要な時間なのかもしれない。

小澤：アトリエのインスタグラムがあって時々発信するんですけど、気づいたらいつも最後に絵文字で「🏠」をつけているのに気がつきました。私の中で「アトリエ」やけど「家」のイメージがあるんだなって。子供の頃に友達の家に行って、「今日は何しようか」みたいな感覚で過ごしてもらいたいな。そういう意味では学びの森の子供たちが、最初のお客さん。

奥山：アリスちゃん家（ち）の最初のお客さんやったんやって、子供たちが知ったら結構嬉しいかも。



